修士論文（要旨）
2021 年 7 月

多文化共生社会におけるノンネイティブ日本語教師の役割
－ライフストーリーから探る日本における韓国人日本語教師のビリーフの変容－

指導　齋藤　伸子　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
218J3902
佐藤　健児

Master's Thesis(Abstract)
July 2021

The Role of the Non-Native Teacher in Multicultural Society: Investigating a Korean, Japanese Language Teacher's Changes in Pedagogical Beliefs and Practice, Using a Life Story Approach

Kenji Sato
218J3902
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Nobuko Saito

目次

序章　多様化する日本語教育と本研究の目的 1
第１章　先行研究 8
1.1　言語学習におけるビリーフ研究 8
1.1.1　ビリーフ研究の始まり 8
1.1.1.1　Horwitz（1985, 1987） 8
1.1.1.2　Wenden（1986, 1987, 1991） 9
1.1.2　ビリーフの研究方法のひろがり 10
1.1.3　ビリーフ研究の３つのアプローチ 11
1.1.3.1　規範的アプローチ 11
1.1.3.2　メタ認知的アプローチ 11
1.1.3.3　文脈的アプローチ 12
1.1.4　ビリーフ研究の目的 12
1.1.5　ビリーフの定義 13
1.2.　ネイティブスピーカーとノンネイティブスピーカーを巡る議論の考察 20
1.2.1　ネイティブスピーカーとは誰のこと？ 20
1.2.2　いつまでもノンネイティブスピーカーはノンネイティブスピーカーか？ 23
1.2.3　人はネイティブ・ノンネイティブ「になる」 24
1.2.4　アメリカにおけるネイティブ批判 25
1.2.4.1　「ネイティブ」対「ノンネイティブ」の二項対立的な権力関係性批判 25
1.2.4.2　ノンネイティブ教師の役割の見直しによる権力関係の脱構築 26
1.3　日本語教育におけるビリーフ研究 27
1.3.1　海外のノンネイティブ日本語教師のビリーフの研究 28
1.3.2　国内のノンネイティブ日本語教師のビリーフの研究 31
1.3.3　ノンネイティブ日本語教師にライフストーリーの手法を用いた研究 33
1.3.4　ノンネイティブ日本語教師のビリーフ研究の課題 35
1.4　第１章のまとめ 37
1.5　本研究の研究課題 39
第２章　調査概要 41
2.1　調査方法 41
2.2　調査協力者 42
2.3　調査内容 43
第３章　データ分析 46
3.1　分析方法 46
3.1.1　TEM の根本概念 46
3.1.2　分岐点（BFP）と必須通過点（PPP） 47

3.1.3　社会的方向付け（SD）と社会的助勢（SG） 47
3.1.4　両極化した等至点（P-EFP） 48
3.2　TEM 作成の手続き 49
3.3　分析的枠組みの設定 57
3.4　発生の三層モデル 58
第４章　分析の結果 61
4.1　TEM 図を用いた分析の結果 61
4.1.1　第１期（ジレンマ期） 61
4.1.2　第２期（継続期） 62
4.1.3　第３期（転換期） 63
4.1.4　第４期（教師継続期） 63
4.1.5　日本語教師の役割に対する意味づけの変容（TLMG） 65
4.2　本研究における TEM 的飽和 66
第５章　リサーチクエスチョンに対する考察 71
5.1　４つのリサーチクエスチョンに対する考察 71
5.1.1　ノンネイティブ日本語教師の人生経験とビリーフ 71
5.1.2　ノンネイティブ日本語教師の学習経験とビリーフ 71
5.1.3　ノンネイティブ日本語教師の日本語運用能力とビリーフ 72
5.1.4　ノンネイティブ日本語教師であるという意識とビリーフ 73
第６章　考察 75
6.1　複数径路等至性アプローチ（TEA）による理論的記述とその意義 75
6.2　日本語教育におけるノンネイティブ教師が内包する意味 75
6.3　「調査するわたし」が持っている問題 77
第７章　本研究の限界と課題 80
7.1　本研究の限界 80
7.2　今後の課題 80

謝辞
参考文献
資料

多文化共生社会を迎える日本において、多様なアイデンティティをバックグラウンドに持つノンネイティブ日本語教師はこれから多くなってくると考えられる。にも関わらず、国内のノンネイティブ日本語教師について議論が行われないことは大きな問題である。なぜなら、ノンネイティブ日本語教師のビリーフを明らかにすることは、ノンネイティブ日本語教師と協働して日本語を教えるネイティブ日本語教師にとっても意義のあることであるからであ、日本語教育の現場において、ネイティブ日本語教師が、彼らノンネイティブ日本語教師に対して、どういう支えをすればいいのかを明らかにできると考える。

本稿は、日本国内の韓国人ノンネイティブ日本語教師のライフストーリーを通して、教師ビリーフの形成と変容の過程を質的に調査・分析して明らかにし、ビリーフの変容の意味を探るとともに、日本語教育におけるノンネイティブ日本語教師の役割を再考することを目的にする。また、ネイティブとノンネイティブとの二項対立関係に対して、大平(2001)が指摘している「規範からの逸脱」としてのノンネイティブの疎外を解消するのに、本研究が、どのような意味を持つかを検討する。

本稿ではライフストーリー研究の手法を採用し、ライフストーリーの分析に複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いる。TEA は、その中核である「複線径路等至性モデル(TEM)」と「歴史構造化ご招待(HSI)」、「発生の三層モデル(TLMG)」を統合したアプローチである。

調査協力者のＡさんは、30 代前半の女性で、韓国のチェジュ（済州島）出身。親戚が日本に住んでいるため、子どもの頃からたびたび日本を訪れていた。現在都内 Ｄ大学大学院博士後期課程で研究を続けながら、都内の日本語学校で留学生を対象に日本語の初級・中級クラスを教えている。稿者とは同じ日本語学校で一緒に働いていたことがある。

TEM で述べられているトランス・ビュー的 TEM 図を描くために、調査協力者に 3 回会い、その過程で試行的に作成した TEM 図を実際に用いながら面接を行った。本研究では TEM の分析的枠組みについて、統合された個人的志向性（SPO）の概念を加えた。ここでは〈留学生の相談にのってあげたい〉を SPO とした。調査協力者の Ａさんは、〈留学生の相談にのってあげたい〉という SPO を持ちながら、〈ノンネイティブ日本語教師になる〉ことを等至点(EFP1)とし、〈ノンネイティブ日本語教師を続ける〉という等至点(EFP2 ・ EFP3)に向かうというのが、本稿における基本的なストーリーである。

しかし、これらの EFP1･2･3 は研究者である本稿が設定したものであり、Ａさん自身の等至点は別にある。本研究では、これをサトウ（2015b）にならい、Ａさん自身の等至点を〈研究論文を書き上げる〉、〈海外で研究者になる〉をセカンド EFP として設定した。

Ａさんの語りから得られたカテゴリーをもとに作成した TEM 図（図 4-1：本稿 p.68）のＡさんの人生を 3 期に区分した。日本に留学するまでを「第 1 期：ジレンマ期」とし、徐々に日本語教師という仕事が視野に入ってくるが、まだ俳優やデザイナーになるのあきらめきれない状態を「第 2 期：継続期」、大学院への進学を決め、ノンネンィティブ日本語教師になるまでを「第 3 期：転換期」とし、Ａさんの人生を分析する。また、図 4-2（本稿 p.69）はＡさんがノンネイティブ日本語教師を続けるプロセスであるので、「第 4 期：教師継続期」として分析する。さらに、発生の三層モデル（TLMG）を用いた、日本語教師の役割に対する意味づけの変容の分析を図 （図 4-3：本稿 p.70）に示す。

TEM 図 4-1 の分析を通して、Ａさんがノンネイティブ日本語教師になるまでの経験が、

そのビリーフの形成過程に大きな影響を与えていることが分かった。〈日本語教師というキャリアがほしい〉という実利的な理由に加えて、Ａ日本語学校での経験から〈留学生の相談にのってあげたい〉という将来ビリーフに成長するものが生まれ、Ａさんが〈ノンネイティブ日本語教師になる〉ことを支えたことが明らかになった。また、TEM 図 4-2 の分析は、日本語教師を辞めるのを 2 度踏みとどまったことにより、Ａさんの SPO としての〈留学生の相談にのってあげたい〉がより明確になったことを示すことができた。さらに、発生の三層モデル（TLMG）を用いて、日本語教師の役割に対する意味づけの変容の分析を行った（図 4-3）。学生に目標意識をちゃんと持って決めてほしい、それを助けたいという日本語教師の役割に対する価値の変容が起こり、【学生の進路や悩みを聞いてあげたい】という教師ビリーフがＡさんの中に成立したことを示すことができた。

下記の図（図 6－1：本稿 p.81）は、ノンネイティブ日本語教師と協働して日本語教育を行っていくかについて本研究独自に案出したモデルであるが、今後この議論を深めていく以外に、ノンネイティブ日本語教師と協働して日本語教育を行っていくかの議論は始まらない。

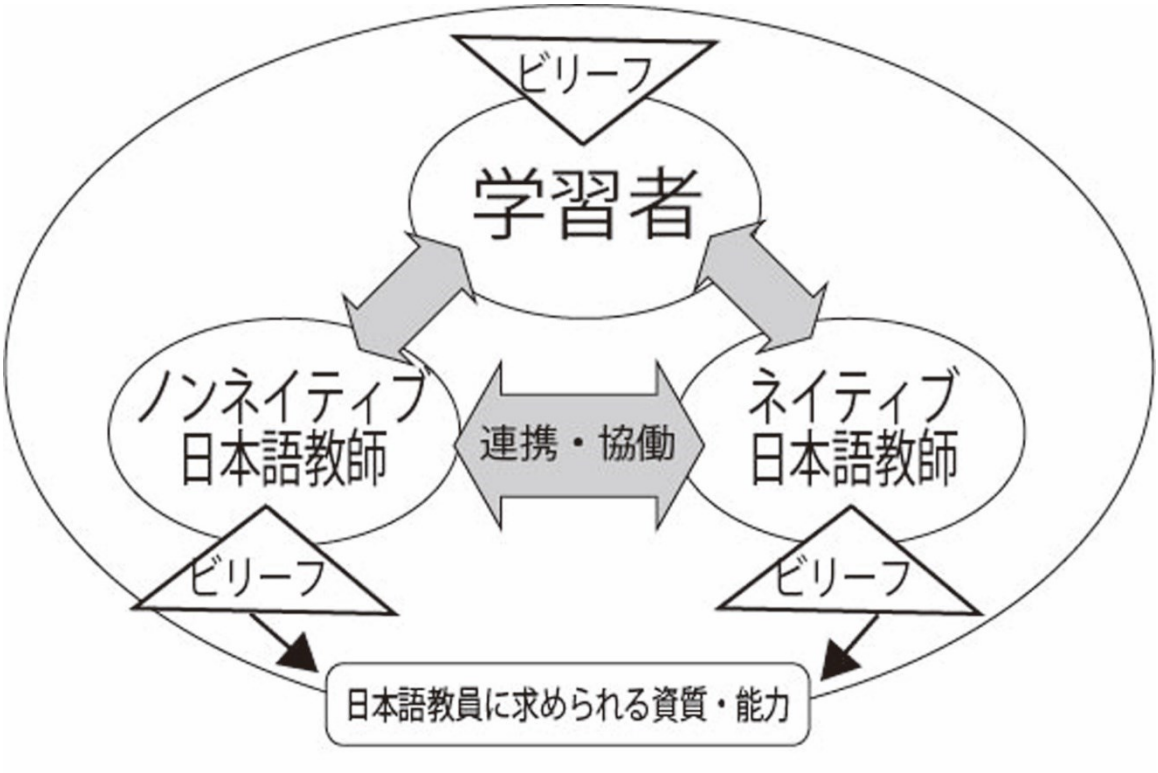

図１　日本語教員に求められる資質・能力とノンネイティブ日本語教師との協働モデル

参考文献

秋田美帆・徳田淳子・布施悠子（2020）「日本における非母語話者日本語教師のキャリア支援を考える―日本語学校で働く新人教師 A さんの語りから―」、『2020 年度日本語教育学会秋季大会　交流広場』発表時配布資料

阿部洋子・横山紀子（1991）「海外日本語教師長期研修の課題―外国人日本語教師の利点を生かした教授法を求めて」『日本語国際センター紀要』1、53-74

安竜洙・渡辺文夫・内藤哲雄（2004）「日本語学習者と日本人日本語教師の授業観の比較－個人別態度構造分析法（PAC）による事例研究－」茨城大学留学生センター紀要、第 2 号、49-59

池上摩希子（2007）「「地域日本語教育」という課題―理念から内容と方法へ向けて」早稲田大学日本語教育研究センター紀要 20 号、105-117

石井恵理子（1996）「非母語話者教師の役割」『日本語学』15 巻第 2 号、87-94、明治書院

板井美佐（1999）「日本語学習についての中国人学習者の BELIEFS－香港城市大学のアンケート調査から分かったことー」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』、第 14 号、筑波大学、163-179

板井美佐（2000）「中国人学習者の日本語学習に対する BELIEFS について－香港４大学の質問紙調査からー」『日本語教育』日本語教育学会、104 号、69-78

内田陽子・坪根由香里・八田直美・小澤伊久美（2020）「あるタイ人日本語教師のビリーフの形成－初任期から 4 年間の PAC 分析による縦断的調査からー」『言語教育学研究』10、1－11

海野多枝・張美淑・秋山佳世・野村愛（2004）「第二言語学習ビリーフ研究に向けての基礎調査」『言語情報学研究報告』5、285-319

太田裕子（2008）「オーストラリアにおける年少者日本語教育の理想・現実・戦略－初等中等教育機関の日本語教師の語りからー」『2008 年度日本語教育学会春季大会予稿集』49-54

大平未央子（ 2001 ）「ネイティブスピーカー再考」山下仁・野呂香代子編『「正しさ」へ問い―批判的社会言語学の試み』、三元社、85-110

岡崎智己（2001）「母語話者教師と非母語話者教師の BELIEFS 比較－日本と中国の日本語教師の場合」『日本語教育』第 110 号、110-119、日本語教育学会

岡崎眸 （1999）「学習者と教師の持つ言語学習についての確信」宮崎里志・ネウストプニー J.V. 共編『日本語教育と日本語学習 学習ストラテジー論にむけて』147-148 、くろしお出版

岡崎眸・堀和佳子（2000）「言語学習についての確信－韓国人日本語学習者の場合－」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第 53 巻、185-201

岡崎眸（2002）「「共生言語としての日本語」教育実習への歩み」『多言語・多文化社会を切り開く日本語教員養成－日本語教育実習を振り返る－2001 年度』お茶の水女子大学日本語教育コース、141-154、教育実習報告書

岡崎眸（2007）『共生日本語教育学―多言語多文化共生社会のために』雄松堂出版

小澤伊久美･嶽肩志江・坪根由香里（2006）「日本語教育における教師の実践的思考に関す

る研究(2)－新人・ベテラン教師の授業観察時のプロトコルと観察後のレポートとの比較より－」『ICU 日本語教育研究』2, 1-21
小澤伊久美･嶽肩志江・坪根由香里（2012)「経験日本語教師が考える｢いい日本語教師｣の要素とその背景にあるもの－教師 A に対する PAC 分析より－」『日本語教育学会秋季大会予稿集』247-248
小澤伊久美･嶽肩志江・坪根由香里（2013)「ある日本語授業についての経験日本語教師 A の語りとその背景にある意識、－マルチメソッドによる分析－」『ICU 日本語教育研究』10, 3-24
片桐準二（2005)「フィリピンにおける日本語学習者の言語学習 Beliefs ―フィリピン大学日本語受講生調査から―」『国際交流基金日本語教育紀要』第 1 号、85-101、国際交流基金
片桐準二（2015)「文脈アプローチによる言語学習ビリーフの形成・変容過程の質的研究」名古屋大学大学院博士（国際言語文化研究科）学位論文
川喜多二郎（1967)『発想法－創造性開発のために』、中央公論社
川喜多二郎（1986)『KJ 法－混沌をして語らしめる』、中央公論社
川口義一・横溝紳一郎『成長する教師のための日本語教育ガイドブック（下)』ひつじ書房
崖高延（2020)「エジプト人日本語学習者とエジプト人日本語教師のビリーフ－エジプト・アインシャムス大学での調査から－」『国際交流基金日本語教育紀要』16、29-40
木谷直之　(1998)「極東ロシアの大学生の言語学習観について－海外日本語教師研修のための基礎データ作成を考える－」『日本語国際センター紀要』8 号、95-109、国際交流基金日本語国際センター
木谷直之・簗島史恵（2005)「大学院修士課程におけるノンネイティブ現職日本語教師の意識変化－学生のジャーナルの分析を通して－」『日本語教育紀要』1、21-36
木下康仁（2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い』弘文堂
久保田美子(2006)「ノンネイティブ日本語教師のビリーフ－因子分析に見る｢正確さ志向｣と「豊かさ志向」－」『日本語教育』第 130 号、日本語教育学会、90-99
久保田美子(2007)「ノンネイティブ日本語教師のビリーフの研究」明海大学大学院博士(応用言語学）学位論文
久保田美子（2009)「ノンネイティブ日本語教師のビリーフの要因－インタビュー調査から共通要因を探る－」『日本語教育をめぐる研究と実践』、凡人社、185-210
久保田美子（2015)「第二言語習得とビリーフ」『中国日本語教育叢書　第三部』中国中央教育出版、121-158
久保田美子（2017)「ノンネイティブ日本語教師のビリーフと学習経験 －2004・2005 年度と 2014・2015 年度の量的調査結果の比較－」『国際交流基金日本語教育紀要』13、7-22
久保田美子（2019)「非母語話者日本語教師のビリーフの変化と成長過程―縦断的インタビュー調査の結果から」『日本語教育』172、73-87
久保田竜子（2008)「ことばと文化の標準化についての一考」佐藤慎司・ドーア根理子（編)『文化、ことば、教育―日本語/日本の教育の「標準」を越えて』明石書店、14-30
黄均鈞・胡芸群（2014)「日本語学校におけるノンネイティブ教師の成長を問う－3 名の中

国人日本語教師への事例研究からー」『2014 年度日本語教育学会春季大会予稿集』、357-358
康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信（2008)「中国人日本語教師の授業スタイル形成としての力量形成ーライフヒストリー的アプローチを用いた事例研究を通してー」2007 年度日本語教育学会研究集会ー第 11 回ー（関西地区）発表資料（2008 年 3 月 1 日於 立命館大学衣笠キャンパス敬学館）
呉禧受（2007)「韓国における日本語教師のビリーフの特徴ー日本人教師と韓国人教師のビリーフの比較を通してー」『ことばの科学』、名古屋大学言語文化研究会、第 19 号、5-22
国際交流基金（2006)『日本語教師の役割／コースデザイン』日本語教授法シリーズ，1，ひつじ書房
齋藤ひろみ（1996)「日本語学習者と教師のビリーフス―自律学習に関するビリーフスの調査を通して―」『言語文化と日本語教育』第 12 号、58-69、お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
阪上彩子（2009)「学習者ビリーフは変容するのかーハンガリー人大学生を対象としてー」、『日本語・日本文化研究』第 19 号、21-34、大阪大学言語文化研究科言語社会専攻海外連携特別コース
桜井厚（2002)『インタビューの社会学―ライフストーリーの聞き方』、せりか書房
佐々木倫子 （2006)「パラダイムシフト再考」『日本語教育の新たな文脈』259-283 、アルク
佐藤紀代子（2011)「DV 被害者支援員としての自己形成」、『TEM でわかる人生の径路ー質的研究の新展開』、誠信書房、55-71
サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・Valsiner, J.（2006)「複線径路・等至性モデルー人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して」質的心理学研究、5、255-275
サトウタツヤ（編著）（2009)『TEM ではじめる質的研究―時間とプロセスを扱う研究をめざして―』、誠信書房
サトウタツヤ・安田裕子・佐藤紀代子・荒川歩 （2011)「インタビューからトランスビューへ―TEM の理念に基づく方法論の提案」日本質的心理学会第 8 回大会プログラム抄録集、70
嶋津百代（2016)「日本語「ノンネイティブ」教師の専門性とアイデンティティに関する一考察」『関西大学外国語学部紀要 』第 14 号、33-46
辛銀眞（2006)「日本国内の非母語話者日本語教師に対する学習者のビリーフの変容ー早稲田の初級実践を通してー」『講座日本語教育』第 42 分冊、60-81
牲川波都季（2012)『戦後日本語教育学とナショナリズム―「思考様式言説」に見る包摂と差異化の論理』くろしお出版
鈴木栄（2015)「学習者のビリーフ研究の探索―ユングの絵画分析を使ったビリーフ検索の試み」『言語文化教育研究』第 13 号、63-82
高崎三千代（2006)「フィリピン・マニラ首都圏の大学における日本語学習者のビリーフー歴史的・社会的背景の視点からの考察ー」『国際交流基金日本語教育紀要』 2 号、国際交流基金、65-80

高橋雅子（2010)「教師間でビリーフの共有を行った教室活動－ベトナムにおけるノンネイティブ教師とネイティブ教師によるティームティーチングでの実践－」『日本語研究』（韓国・中央大學校日本研究所） 28、181-197
高橋雅子（2015)「国内の日本語教育における非母語話者教師に関する考察―多文化共生社会における語学教師の多様性を問う―」『日本語教育実践研究』第２号、立教日本語教育実践学会、104-113
嶽肩志江･坪根由香里･小澤伊久美（2009)「教師の実践的思考を探る上でのビリーフ質問紙調査の可能性と課題－日本語教育における教師の実践的思考に関する研究(3)－」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』16, 37-56
嶽肩志江･坪根由香里･小澤伊久美・八田直美（2012)「PAC 分析と質問紙調査併用によるビリーフ研究－あるタイ人日本語教師の事例より」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』 20、93-114
田中信之（2006)「中国人学習者を対象としたピア・レスポンスービリーフ調査から話し合いの問題点を探る－」『小出記念日本語教育研究会論文集』第 14 号、p.21-35、小出記念日本語教育研究会
田中里奈（2006)「戦後の日本語教育における思想的「連続性」の問題―日本語教科書に見る「国家」,「国民」,「言語」,「文化」」『リテラシーズ』2、83-98
田中里奈（2013a)「言語教育における「言語」, 「国籍」, 「血統」―在韓「在日コリアン」の日本語教師のライフストーリーを手がかりに」早稲田大学大学院博士（日本語教育研究科）学位論文
田中里奈（2013b)「日本語教育における「ネイティブ」/「ノンネイティブ」概念―言語学研究および言語教育における関連文献のレビューから」『言語文化教育研究』第 11 号、特集号「言語文化教育の思想」、95-111
田中里奈（2016)『言語教育における言語・国籍・血統―在韓「在日コリアン」日本語教師のライフストーリー研究』、明石書店
ダン・クィン・チャム（2003)「ベトナムにおける日本語の会話授業の改善―コミュニケーション活動を積極的に取り入れるために」『日本語教育指導者養成プログラム論集』第２号、政策研究大学院大学、29-64
坪根由香里・小澤伊久美・八田直美（2013)「韓国人経験日本語教師のビリーフを探る－「いい日本語教師」に関する PAC 分析の結果から－」『大阪観光大学紀要』第 13 号、67-78
坪根由香里・嶽肩 志江・小澤伊久美・八田直美（2015)「いい日本語教師」に関する中国人新人教師のビリーフ －PAC 分析の結果から－」『大阪観光大学紀要』第 15 号、33-42
坪根由香里・八田直美・小澤伊久美（2017)「タイ人日本語教師 A のビリーフの形成と変容―PAC 分析による縦断的調査から－」『海外日本語教育研究』4、1－22
坪根由香里 ・八田直美・小澤伊久美・内田陽子（2018)「縦断的質問紙調査から見るタイ人日本語教師 A のビリーフ」『大阪観光大学紀要』第 18 号、1-9
弦間亮（2009)「学生相談室に相談したかったが相談できなかった経験の径路－TEM による大学生の語りの分析（2010 年 8 月 29 日開催 TEM 研究会資料)『TEM でわかる人生の径路－質的研究の新展開』、誠信書房、125-137
鄭幸子（2010)「韓国社会と「在日韓国人」2 世、3 世のアイデンティティーの変容におけ

る一考察－韓国留学経験者を中心に」東アジア研究 、第 54 号、61-78、大阪経済法科大学アジア研究所
内藤哲雄（2002）『PAC 分析実施法入門―「個」を科学する新技法への招待』［改訂版］ナカニシヤ出版
中嶌洋（2015）『初学者のための質的研究２６の教え』医学書院
野々口ちとせ （2007）「非母語話者実習生の自己受容－内政モデルに基づく共生日本語共生日本語実習の場合－」岡崎眸（監修）『共生日本語教育学』115-126、雄松堂出版.
西口光一（2001）「状況的学習論の視点」、青木直子、尾崎明人、土岐哲編『日本語教育学を学ぶ人のために』105-119、世界思想社
橋本洋二（1993）「言語学習についての BELIEFS 把握のための試み ： BALLI を用いて」筑波大学留学生センター日本語教育論集、第 8 号、215-241
八田直美（2009）「ノンネイティブ日本語教師にとっての『教師の成長』―訪日研修参加者へのインタビュー調査から―」『日本語教育の過去・現在・未来』第 2 巻、凡人社 、159-180
人見楠郎（1991）『日本語教師の自己評価・自己研修システムの開発をめざして－日本語教師の教授能力に関する評価・測定法の開発研究報告書』文部省科学研究補助金研究、総合研究（A）研究課題番号 01102050
廣瀬眞理子（2010）「セルフヘルプ・グループにおけるナラティブ―「ひきこもり」親の会の実践を通して」（2010 年 7 月 30 日開催 TEM 研究会発表）、『TEM でわかる人生の径路－質的研究の新展開』、誠信書房、71-87
平畑奈美（2008）「アジアにおける母語話者日本語教師の新たな役割―母語話者性と日本人性の視点から『世界の日本語教育』18、1-19
福永達士（2015）「タイ人日本語教師の教師認知 ： タイ中等教育機関におけるビリーフ調査から」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』12、27-36
古市由美子(2007)「多言語多文化共生日本語教育実習を通してみた非母語話者教師の役割」『小出記念日本語教育研究会論文集』第 13 号、23-38
星摩美（2014）「日本語教師の持つビリーフの要因と変化に関する縦断的研究 ： 質問紙調査結果に見る韓国中等教育における国家シラバス「教育課程」と日本語教師のビリーフ」人間社会環境研究、第 28 号、33-50
星摩美（2015）「マレーシア中等教育日本語教師の持つビリーフの要因に関する研究」『人間社会環境研究 7』30、91-108
星摩美（2016）「韓国中等教育日本語教師の実践とビリーフ―変化とその要因を中心に―」『日本語教育』第 165 号、日本語教育学会、89-104
星摩美（2017）「日本語教師のビリーフ研究」金沢大学大学院博士（人間社会環境研究科）学位論文
細田和雅・伊藤克浩・水田直美（1994）「日本語学習者と日本語教師養成課程大学生の日本語学習に関するビリーフ」『広島大学日本語教育学科紀要』第 4 号、85-90
松田真希子(2005)「現職日本語教師のビリーフに関する質的研究」長岡技術科学大学言語・人文科学論集、19 号、215-240
松本匡史（2019）「コスタリカ日本語教育における NT と NNT の同異点－言語学習ビリーフ調査を通して－」『さいたま言語研究』3、13-25

松本匡史（2020）「コスタリカ人日本語学習者の言語学習ビリーフの特徴」『さいたま言語研究』4、1-13
三井豊子・丸山敬（1991）「自己評価システムの試み２」人見楠郎他（1991）『日本語教師の自己評価・自己研修システムの開発をめざしてー日本語教師の教授能力に関する評価・測定法の開発研究報告書』、62-80
水田直美・黄其正・張金塗・伊藤克浩・細田和雅（1995）「日本語学習に関するビリーフー台湾とオーストラリアの大学生日本語学習者の比較ー」『広島大学日本語教育学科紀要』第 5 号、p.61-66
文京洙（2008）『済州島四・三事件ー「島（タムナ）のくに」の死と再生の物語』、平凡社
森直久（2009）「第 3 章　TEM 動乱期（2006－2007）第 3 節　第一期 TEM 完成，その後」、サトウタツヤ（編著）（2009）『TEM ではじめる質的研究―時間とプロセスを扱う研究をめざして―』、誠信書房、75－91
森直久（2012）「第 3 章　第１節　発達研究の枠組みとしての TEM」、安田祐子・サトウタツヤ（編著）（2012）『TEM でわかる人生の径路ー質的研究の新展開』誠信書房、165－171
森本郁代（2001）「地域日本語教育の批判的な再検討ーボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して」野呂香代子・山下仁（編）『正しさへの問いー批判的社会言語学の試みー』215-247、三元社
安田祐子（2005）「不妊という経験を通じた自己の問い直し過程― 治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から」、質的心理学研究、４巻 1 号、201-226
安田祐子・サトウタツヤ編（2012）『TEM でわかる人生の径路ー質的研究の新展開』誠信書房
安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）（2015a）『TEA 理論編ー複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社
安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）（2015b）『TEA 実践編ー複線径路等至性アプローチを活用する』新曜社
若井誠二・岩沢和宏（2004）「ハンガリー人日本語学習者のビリーフス」『日本語国際センター紀要』 第 14 号、123-140
横山紀子（2005）「第 2 言語教育における教師教育研究の概観―非母語話者現職教師を対象とした研究に焦点を当てて―」『国際交流基金日本語教育紀要』第 1 号、1-19
横山紀子（2007）「非母語話者教師の目標言語学習が学習観・指導観に及ぼす影響：再教育における聴解学習に関する実証的研究」『日本語教育』132、98-107
好井裕明（2004）「「調査するわたし」というテーマ」、好井裕明・三浦耕吉郎編『社会学的フィールドワーク』、2-32、世界思想社
吉川景子（2020）「ラオス中等教育学校における日本語学習者の言語学習ビリーフー教科書開発と教師研修の改善に向けてー」教職課程研究、31、姫路獨協大学教職課程研究室、75 - 91
若月祥子・大塚薫（2002）「韓国の大学における日本語教師の現状と役割」小出記念日本語教育研究会論文集アーカイブ
渡辺晴世（1990）「学習者のビリーフスとラーニングストラテジーー学習者からの言語学習に関する情報獲得の試み」『日本語教育論集』第 7 号、94-119、国立国語研究所日本語

教育センター
Abraham. R.G., ＆Vann, R. J.（1987) Strategies of two language learners: A case study. In A. Wenden & J. Rubin (Eds.) , *Learner Strategies in Language Learning*, 85-102. London: Prentice Hall.
Barcelos, Ana Maria Ferreira（1995）*A cultura de aprender língua estrangeira (inglês) de alunos formandos de Letras.* [The culture of learning a foreign language(English) of Language students]. Unpublished Master's Thesis, UNICAMP, San Paulo, Brazil.
Barcelos, Ana Maria Ferreira （2003） Researching Beliefs About SLA: A Critical Review. In P. Kalaja and A.M.F. Barcelos（Eds.）. *Beliefs about SLA: New Research Approaches*, 7-33. Netherlands: Kluwer Academic Publishers.
Barcelos, Ana Maria Ferreira and Kalaja, Paula （2011） Introduction to Beliefs about SLA revisited, *System* 39, Issue 3, 281-289.
Benson, P.,＆ Lor. W（1999）Conceptions of language and language leaning. *System*, 27(4), 459-472.
Bloomfield, Leonard （1933） *Language*. New York: Holt and Co. （レナード・ブルームフィールド（1962)『言語』服部四郎序、三宅鴻・日野資純訳、大修館書店）
Byram, M. （1997）*Teaching and assessing intercultural communicative competence.* Clevedon: Multilingual Matters.
Canale, M and Swain, M.（1980）Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing. *Applied Linguistics* 1/1; 1-47
Chomsky, Avram Noam（1965）*Aspects of The Theory of Syntax*, Mass.: The MIT Press.
Cortazzi, M; Jin, L. (1996) Cultures of Learning: Language Classrooms in China in H. Coleman(ed.) *Society and the Language Classroom*, 169-203, Cambridge University Press.
Cook, V. （1999）. Going beyond the native speaker in language teaching. *TESOL Quarterly*, 33（2）, 185-209.
Cook, V. （2005）. Basing teaching on the L2 users. In E. Llurda （Ed.）, *Nonnative language teachers: perceptions, challenges and contributions to the professions* , 47-61. New York: Springer.
Cotterall, Sara （1995） Readi ness for Autonomy: Investigating Learner Beliefs. *System*, Volume 23, No.2, 195-205.
Cotterall, Sara （1999） Key variables in language learning: what do learners believe about them? *System* , Volume 27, Issue 4, 493-513.
Davies, A.（1991）*The Native Speaker in Applied Linguistics*, Edinburgh: Edinburgh U.P.
Davies, A.（2003） *The native speaker: Myth and reality*. Clevedon: Multilingual Matters.
Doerr, N. M. （2009）. Investigating "native speaker effects": Toward a new model of analyzing "native speaker" ideologies. A. Curtis & M.Romney （Eds.）, *Color, race*

and English language teaching: Shades of meaning , 15-46. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

Firth, A., & Wagner, J.（1997）On discourse, communication, and（some）fundamental concepts in SLA research. *Modern Language Journal*, 81（3）, 285-300.

Gardner, R. C.（1988）The Socio－Educational Model of Second－Language Learning: Assumptions, Findings, and Issues. *Language Learning*. 38(1), 101-126.

He, A. W., ＆ Young, R.(1998) Language Proficiency Interviews: A Discourse Approach. In R. Young, & A. W. He （Eds.）, *Talking and Testing: Discourse Approaches to the Assessment of Oral Proficiency* , Philadelphia: John Benjamins.

Hall, J. K.（1995）（Re）creating our Worlds with Words: A Sociohistorical Perspective of Face-to-Face Interaction, *Applied Linguistics*, 16, 206-232.

Holec, H.（1987）The Learner as Manager: Managing Learning of Managing to Learn? In Anita Wenden & Joan Rubin (Eds.), *Learner Strategies in Language Learning*, 145-156. London: Prentice Hall.

Holstein, A. James and Jaber F. Gubrium （1995）The Active Interview, Thousand Oaks: Sage Publications.（ジェイムス・ホルスタイン、ジェイバー・グブリアム (2004)『アクティヴ・インタビューー相互行為としての社会調査』山田富秋他訳、せりか書房）

Horwitz, Elaine K. （1985） Using Student Beliefs About Language Learning and Teaching in the Foreign Language Methods Course. *Foreign Language Annals*, 18, No.4, 333-340.

Horwitz, Elaine K. （1987） Surveying Student Beliefs About Language Learning. In Wenden Anita . and Rubin J. eds., *Learner Strategies in Language Learning* . London: Prentice Hall. 119-129.

Horwitz, Elaine K. （1999） Cultural and situational influences on foreign language learners' beliefs about language learning: a review of BALLI studies. *System* , Volume27, Issue 4, 557-576.

Hymes, D. （1972）On Communicative Competence, In: J.B. Pride and J. Holmes （Eds.）, *Sociolinguistics. Selected Readings*. Harmondsworth: Penguin Books

Hymes, D. （1974）*Foundations in Sociolinguistic*s: An Ethnographic Approach. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.（ハイムズ、D. （1979)「ことばの民族誌―社会言語学の基礎」唐須教光訳、東京紀伊國屋書店）

Kasper, G.（1997）Beyond Reference , in Kasper, G. and E.Kellerman.（Eds. ）, *Communications Strategies: Psycholinguistics and Sociolinguistic Perspectives*, London: Longman.

Kramsch, C.（1986）From Language Proficiency to International Competence, *Modern Language Journal* 70/4: 366-372.

Kramsch, C.（1997）The privilege of the nonnative speaker. PMLA, 112, 359－369.

Kubota, R., & Lin, A.（2006）Race and TESOL: Introduction to concepts and theories. *TESOL Quarterly*, 40（3）, 471-493.

Kubota, R. （2009） Rethinking the superiority of the native speaker: Toward a relational understanding of power. In N. M. Doerr （Ed.）, *The native speaker concept: Ethnographic investigations of native speaker effects* , 233－247. Mouton De Gruyter.

Medgyes P.（1992）Native or non-native: Who's worth more? *ELT Journal,* 46（4）, 340-349.

Miller, L., ＆Ginsberg, R.B. （1995）Folk-linguistic theories of language learning. In B. Freed (Eds.), *Second language acquisition in a study abroad context*, 293-315. Amsterdam: John Benjamin.

Nero, S. （2006）. An exceptional voice: Working as a TESOL professional of color. In A. Curtis & M. Romney （Eds.）, *Color, race and English language teaching: Shades of meaning* , 23-48. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

Nunan, D., & Choi, J.（2010）Language and culture: Reflective narratives and the emergence of Identity. New York: Routledge.

Okubo, Y. （2009）. The localization of multicultural education and the reproduction of the "native speaker" concept in Japan. In N. M. Doerr （Ed.）, *The native speaker concept: Ethnographic investigations of native speaker effects* , 101-131. Mouton De Gruyter.

Paikeday, T. M. （1985） The Native Speaker is Dead!, Toronto, Ont.: Paikeday（トーマス・M・パイクデー（1990）『ネイティブスピーカーとは誰のこと？』松本安弘・松本アイリン訳、丸善出版）

Pajares, M. F.（1992） Teacher's Beliefs and Educational Research: Cleaning Up a Messy Construct. *Review of Education Research*, 62(3), 307-332.

Riley, P.(1989) Learners' representation of language and language learning: *Mélanges Pédagogiques C.R.A.P.E.L*, 2, 65-72.

Riley, P.(1994) Aspects of learner discourse: Why listening to learners is so important. In E. Esch(Ed.), *Seif-Access and the adult language learner*, 7-18. London: Centre for information on language teaching.

Riley, P.（1997）The guru and the conjurer: aspects of counselling for self-access. In Benson , P., & Voller .P. (Eds.) , *Autonomy and independence in language learning* , 114-131, New York: Longman.

Sakui, K. and Gaies, S.J.（1999）Investigating Japanese learners' beliefs about language learning. *System* , Volume 27, Issue 4, 473-492.

Valsiner, J.（2007）*Culture in Minds and Societies: Foundation of Cultural Psychology*. Sage Publications.

Victori, M. （1999） An analysis of writing knowledge in EFL composing: a case study of two effective and two less effective writers. *System* , Volume 27, Issue 4, 537-555.

Wenden, A. （1986） What do Second Language Learners Know about their Language Learning? A Second Look at Retrospective Accounts. *Applied Linguistics* , Volume 7, No. 2, 186-205.

Wenden, A.（1987）How to be a successful language learner: Insights and prescriptions from L2 learners. In Wenden.A & Rubin.J（Eds.）*Learner strategies in language learning*, 103-118. London: Prentice Hall.
Wenden, A. （1991） *Learner Strategies for Learner Autonomy.* London: Prentice Hall.
Wenden, A. （1999） An introduction to Metacognit ive Knowledge and Beliefs in Language Learning: beyond the basics. *System* , Volume 27, Issue 4, 435-441
White, Cynthia （1999） Expectations and emergent beliefs of self instructed language learners. *System* , Volume 27, Issue 4, 443-457.
Woods, Devon （2003） The Social Construction of Belies in the Language Classroom. In Kalaja, Paula and Barcelos, Ana Maria Ferreira（Ed.）, *Beliefs about SLA* , Springer Science+Business Media, LLC, 201-229.
Yang, Nae Dong （1999） The relationship between EFL learners' beliefs and learning strategy use. *System* , Volume 27, Issue 4, 515-535.
Young, R. （1999） Sociolinguistic approaches to SLA. *Annual Review of Applied Linguistics*, 19, 105-132.

参考サイト

国際交流基金（2018）報告書『海外の日本語教育の現状　2018 年度 日本語教育機関調査より』（情報取得日：2021 年 5 月 7 日）
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey18.html
国際交流基金（2020）「日本語教育におけるビリーフ研究の今、そしてこれから」久保田美子、日本語教育通信、日本語・日本語教育を研究する、第 48 回
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/reserch/202012.html
文化庁（2019）「令和元年度国内の日本語教育の概要」、Ⅱ 日本語教師養成・研修の現状について、６内訳図表、受講者数（国・地域別）（上位２０か国・地域）、31
（情報取得日：2020 年 12 月 2 日）
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/r01/
法務省「在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表」（1990 年・2012 年 12 月末・2020 年 6 月末）（情報取得日：2021 年 5 月 16 日）
http://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html